

大橋須磨子

長谷川時雨

青空文庫

霜月はじめの、朝の日影がほがらかにさしている。澄みきった、落附いた色彩と香があたりを漂い流れている。

朝雨にあらわれたあとの、すがすがしい空には、パチパチと弾ける音がして、明治神宮奉祝の花火があがっている。小禽が枝から飛立つ羽ぶきに、ふち紅の、淡い山茶花が散った。

今日中にはどうしても書いてしまわなければならぬと思いつきながら、目のまえの一本か二本の草木をながめ、引窓からながめるような空の一小部分を眺めて、ぼんやりとしている。

けれど、秋の香は、いつまでわたしをそのままにしておかなかった。菊のかがりが、ふと心をひくと、頭の底の方で鼓の音が丁と響ききこえた。爽かに冴えた音は、しんと頭を澄ませてくれた。それにつれて清朗な笛の音も聞える。そして、湿やかに、なつかしみのある三味線の音もあった。

ごしやごしやと、乱れた想で一ぱいだったと思つた頭のなかは、案外からつぽだったと

見えて、わたしは何時かよい気持ちになつて、ある年のある秋の日に、あの広々した紅葉館の大広間にいて、向うの二階の方から聞えてくるものの音に、しんみりと聞き耽つていたのが、いま目前に浮びあがつて、その音曲の色調を楽しみ繰出している――

――ななつになる子が、いたいけなこと言た。とのごほしと唄とうた……

上方唄の台広の駒にかかる絃は、重くしつとりと響いた。こい毛を、まつくろな艶に、荒齒の毛すじあとをつけた、ほどのいい丸鬚に結つて、向うむきに坐つて三味線をひいている人がある。すこしはなれたところに、色白な毛の薄い老女が、渋い着ものをきて、半分は後見役で、半分は拝見の心持ちで、坐っている。もう一人大柄な、顔もおおきい、年もかなりまさっている老女が、頭のまん中へちいさな簪巻きを（糸巻きという結びかたかも知れない）つけて、細い白葛引きをぴんと結んで、しゃんとした腰付きではあるが、帯をゆるくしめて、舞扇をもつて立っている。

その傍に、小腰をかがめて媪の小舞を舞うているのは、冴々した眼の、白い顔がすこし赤らみを含んで、汗ばんだ耳もとから頬へ、頬から頸の、あるかなきかのおしろいのなまめき――しつとりとした濡れの色の鬢つき、銀杏がえしに、大島の荒い一つ着に黒

繻子の片側を前に見せて、すこしも綺羅びやかには見せねど、ありふれた好みとは異っている女が、芸にうちこんだ生々しさで、立った老女の方へ眼をくぼっている——

——さてもさても和ごりよは、誰人の子なれば、定家かつらを——

京舞井上流では、この老女ものの小舞は許しものなので、人の来ない表広間の二階の、奥まった部屋にこの四人は集っている。薄暗いほど欄間の深い、左甚五郎の作だという木彫のある書院窓のある、畳廊下のへだての、是真の描いた紅葉の襖をびったり閉めて、ほかの座敷の、鼓や、笛の音に、消されるほど忍びやかに稽古をつけている。

立っている、糸巻きに鬚結んだ老女が、井上流の名手、京都から出稽古に来て滞留している京舞の井上八千代——観世流片山家の老母春子、三味線を弾いているのは、かつて、日清役のとき、威海衛で毒を仰いで死んだ清国の提督、丁汝昌の恋人とうたわれたおしかさん、座っている老女は、紅葉館創立以来のお給仕の総指揮役で、後見役のおやすさん。舞いをならつていた女は、それらの人たちにとっては、客人でもあり、もすこし親しみのある以前の朋輩でもあった大橋夫人須磨子さんだった。

美に対する愛惜——そうした分明した心持ちを知らなかった時分のことではあるが、

わたしはある日、呉服橋の中島写真館で、アルバムをくってゆくうちに、一枚の写真の人物に引きつけられて、忘れられない美しい女ひとを目に残した。今から廿二、三年も前のことで、五、六人の美女にとりまかれて、もつとも美しい女が中央まんなかに立って踊っている、そのひとだった。星のような眼がすこし笑っていた。おなじ連中で、歌がるたをとっているのもあったが、わたしはどうした事か踊りの方にひきつけられていた。そして中央の美人は、濃い髪を銀杏がえしに結つて、荒いかすり——その頃は漸ようやくはやりだしたばかりだと思つた——大島紬つむぎを着て写つていた。

しかし、わたしはその人たちが何処どこの連中だか知らなかった。知つたにしたところがその美しい人は、もう紅葉館の美姫としてではなかった頃であろう。その後ほどなくわたしは竹柏園ちくはくえん先生のお宅の、お弟子たちの写真箱の中から、中島写真館で見出したとおなじ人の、おなじ写真を見出した。

「この方は、どなたで御座いましょう、先生」

わたしの声は悦よろこびに額かぶえていたに相違なかった。

「博文館の大橋さんの夫人です」

そう聞くと、その姿こそ見る時がなかったけれど、紅葉館でも勝すぐれた美貌の女であった

ということだけは知っているので、なるほどそうかと、不思議に満足をした気持ちであった。

その後、近々と、この麗人を見る日が幾度かあった。ことに美しいと見たのは、もう三十幾つ——四十に近いと聞いていたが、ある年の晩春に、一重ぎくらが散りみだれる庭に立った、桜鼠色の二枚重を着た夫人ぶりであった。いかな高貴の人柄というもはずかしくない、ねびととのつた姿で、その日は、貴紳、学者、令嬢、夫人の多くのあつまりであつたが、優という字のつく下に、美と、雅と、婉と、いずれの文字をあてはめても似つかわしいのはこの人ばかりであると、わたしの眼は吸いつけられていた。金欄の帯が、どんなに似合つたことぞ、黒髪に鼈甲の櫛と、中差しとの照り映えたのが輝くばかりみずみずしく眺められたことぞ。わたしは、昔物語のなかの、なにがしの御息所などいう藤たげな女君に思いくらべていたりした。

出世を矯ぶらない、下のものにも気の軽そうな気質は、一言二言の言葉のなかにもほのめいて見られる。この人よりは顔も普通で、出世もさほどでない女さえ、我第一の器量人といったふうには振舞うのが多いのに、大橋家の家憲がそうしたのか、彼女の生れたちがそうなのか、立入って知らないが奥床しいと思つた。

近代的なひらめきはないが、そうしたところのないのが、しつとりとした落付きのある、たいけ大家の夫人としての品を保たせていた。わたしはぴったりとその女ひとの胸に触れたことがないので、情の人か、理智の人かそれすら知らないが、りこう伶俐な人であることは言わずもがなであろう。

わたしの思出は、また紅葉館の、あの広々とした二階の一室へともどる――

だいびろ台広こまの駒の、かみがたうた上方唄の三味線の音がゆるく響くと、涙がくゆってくるのであった。

わたしの妙に思いやりのある心は、そうしたおりに意地悪く、この幸運な女ひとと、向いあつて坐っている人の上に廻つてゆくのであった。聞きしみていた三味線の、いと絃の顫えから、しずく雫してくるものが、妙にわたしの胸を一ぱいにさせるのであった。

ながうた長唄でも、とみもと富本でも、きよもと清元でも、ときわす常磐津でも、おしかさんは決して何処へでも

負けはとらない腕き利きで、大柄な、年の加減でつぶりして来たが、若い時分にはさぞと
思われる立派な、派手な顔立ちで、京生れで言葉は優しいが、色はたいして白くはない。
まゆげ眉毛のくつきりしている髪の毛の実に好い女だった。

紅葉館が明治十幾年かに創業のおりは、当今の女優気分と、カフェーの給仕きゆうじ気分と、

いにしえの太夫の気分とを集めたものへ、芸妓の塩梅あんばいと、奥女中のとりなしとを加減して、そのころの紳士の慰楽の園としようとしたり目論見もくろみで、お振袖ふりそでを着せて舞わせもし、またすすきりと水ぎわの立つた粹いきな酌人しやくじんも交ぜた。おさないものは稚児鬘ちごまげの小性こしょうぶりにしてしたてた。

家禄を返還した士族——旗本上りも、諸藩の家人けにんも馴なれない時世に口をぬらしかね、残してきたものも売りはらいきってしまった時分のこと、そうした人たちの娘が、多く集められ、京都からも多く連れてきた。むきむきの諸芸をしこんで出したので、あっぱれ紅葉館は時代に応じた、明るい華やかな、一種の交際場となったのだった。諸芸の取締り兼、酌のとりかたを教える師匠番によべたのが、吉原よしわらの廓くわくからおよしさん（現在は某氏夫人である）と、品川から常磐津のおしよさんのおやすさんの二人。

その当時は、廿四、五だった、色白の、すらりと身長の高い、薄菊石うすあばたのある、声の好い、粹なおやすさんが、もう六十五、六になって、須磨子さんの京舞を見ている。おしよさんも最早もはや古参株こさんぐらで、それらの老女の一、二人を除くと、動かさない中老どころだ。廿五年勤続の祝いも五、六年前に済んで、もうやがて五十路にも近かろう。

けれども、おしかさんもまだ水々した年増だ。四十を越したとは、思われぬ若やかさであったが、しかし、おしかさんと須磨子さんとの間には、十代の差があるように、その日の、光りの暗い襖のかけでは見えた。

玄関脇わきの小砂利こじやりの上には形かたのよい自動車自動車が主人を送つて来て控えている。その車の主こそ京舞の許しものを、昔のおしよさんの出京している間だけならいに通つている、芸ごとが好きな須磨子夫人だった。番町の邸では、時折家族で——子供衆たちの催しではあるうが——大仕掛けなお伽芝居とぎぎが催されたり、藤間勘十郎ふじまかんじゅうろうのお浚さくらいなどに令嬢の一人舞台で見せられる時もあった。

おしかさんと須磨子さんとは、たしかおないどし生れで、踊り子のなかで、お絹、おまきにつづいて、美貌と上手であった須磨子は、十八の盛りを大橋氏の手に引きとられた。

明治文壇を硯友社けんゆうしゃの一派が風靡ふうびしたおりとて、紅葉館の女中の若い美女たちが、互いに好き好きの作者に好意を持つようになったのは、硯友社の尾崎紅葉氏おぎさきこうようが芝公園近くに生れて、その名さえゆかりもあるところから、意気もあい、当時の人気作家、花形の青年たちは、毎夜のように、紅葉の襖ふすまの照り映はゆる、燈火ともしびのもとに集まったのだった。

そんなことから、後に紅葉の傑作「金色夜叉」が出ると、お宮はお須磨さんがモデルで、貫一は巖谷小波氏だという噂なども高かった。それよりも、美しさを妬んでか、出世を呪つてか、俳優では幸四郎、お能の方では、京都の片山九郎三郎のと、とやかくと噂するものもあつたが、大橋家には家を起した賢夫人が姑としてあつたからには、そうしたロマンスは紅葉館の花形であつた美姫の、華やかな語りぐさに過ぎまい。情の港のとまり船、さまざま甘い、かなしい追憶の積荷は、三味線をとつて、お相手をして、地を弾いていゝるおしかさんの方にこそ、思いやられることが沢山にある。

おしかさんは数々の人に浅くはなく思われたが、みんなえにしが浅かつた。支那の丁汝昌よしやうが日本にいるうち、おしかさんの傍を離れかねていた。彼国へ帰つてからも切々な思いは、あの英雄に断腸の文をしたためさせた。あの戦争が起つてからも、あわれな提督はおしかさんを忘れはしなかつた。その気持ちをしつてゐるものは丁汝昌の心を察して、わたしにしみじみと語つてきかせたことがある。わたくしはおしかさんと膝組みひざぐみで、そうした恋のいきさつを聴いて、おしかさん一人について何時か委しく書こうと思つてゐる。わたしはおしかさんの手箱の中には、丁汝昌の秘文が蔵されてゐないことはなからうと思

っている。

モルガンお雪の名は高かったが、そのモルガンは、本国で恋に破れて来た痛手を、おしかさんによつて柔らかく撫なでてもらおうと祈つたのだったが、そのころおしかさんは、故このえあつまろ近衛篤磨侯爵に思われていたおりのので、モルガンの願いはすげなくされた。異郷へ鬱うつを慰めに来た身が、またしても苦しい思いをして、彼れはせめてゆかりのある言葉を聞くうと、おしかさんのなまりとおなじことばで語る京都へ行って、祇園ぎおんで名もなかつたお雪を受出したのだ。そういう張はり合あはあつてもなくても、侯爵の思いようも一通りではなかつた。誰れでもおしかさんは別べつ者ものにして、近衛様のお側そくしつ室さま格に思い、やがて呼迎えられる日のあることを、遅かれ早かれ、約定やくじようず済みのように傍の者も思っていたが、侯爵は思いもかけぬ病気で不意にこの世を去られた。

それからのおしかさんに、良い日のないではなかつたが、最初にあまり良き人々に愛されすぎて、盛りがすぎてゆくとは反対に、誇りの方が高くばかりなつていった。後には長く紅葉館の支配人をしていた某氏と、殆どほとん夫妻のように見られていたが、その人にも死別してしまった。いまでは、昔はそういう人であつたかと、若いものにおりおり顔を見直させるだけで朽ちてゆくとうとしている。

恋に生きた昔は知らず、得意な女と、失意の女とが、おなじ起伏おきこぶのころのように、一人は踊り、一人は地を弾いて相向っている――

須磨子夫人が昔をふりかえって、以前の友達にむかつてもらしたという感想は、

「若かったから辛抱しられたのです。とてもいまじゃあ……」

というのである。でも、知っているものは、そうでしょうともといった。

若い心には、正直な一生懸命さがある。彼女も昨日までの華やかな世界を捨て、小禽ことりのようにおどおどとして舅しゅうと姑とにつかえたのだろう。

大橋家は、もうその頃では有数の資産家として、書籍出版業としても第一の店となっていたが、父子ともに計って富を一代に築きあげた、立志伝中の一家であった。越後えちごの寒村から出て来て、柳原河岸がしに古本の店を出していた時分は、いまだ時節が到来せず、かなりな苦境におち、赤貧のおりもあつたが、姑は良き妻、好よき母であつて夫にも子にもその苦しみを訴えず、出来るかぎりを尽して働くものの口を糊のりした。それに励まされた父と子は、あれかこれかの末に、印税の入らぬ古い物語を集めて新らしく組み直して売り拵めた。時代の嗜好しこうに合した意外の成功に、次から次へと手を拵げて、当りつづけ、新しく戦争成金

の続出のために、むかしからの資産家のように見なされてしまうように、幸運は何日も家の棟むねの上にいた。炯けいがん眼よく人世必要の機微をとらえ、学者、文人、思想家を、店員なみに見なすような巨豪になつたとはいえ、その成功はみな書物の貴さによつてだった。

姑は賢女だった。貧に暮した時を忘れず、傲おごりを警いましめて、かなり店が手広くなつてからでも、窮乏した昔を忘れなかつた。店員のために蚊帳かやを買わねばならなかつたが、金の都合で古い古いものを買つて来て、青い粉で蚊帳を染め、新らしいものらしく見せかけたが、古蚊帳も青く染つたかわりに、自分の手首もまつ青に染つてしまつてなかなかおちなかつたのを、それと見た若者たちが、わざと、どうしたのかと一々たずねて困らされた事などを、晩年になつても語りきかせていたというので、成功のかげには、こうした苦心もあるとの教訓も、華やかにくらしてきた、須磨子さんには、苦しいものであつたらう。

ある人が、彼女の花の盛りから今日まで、親しく交わつての感慨に、彼女の美は衰えを知らぬのに、それにくらべて自分が男子として、碌ろくろく々と日を過して来たと嘆息して、

「七人の子をもてば大概の女の容色は萎しぼむものなのに、あの人は頸くびにも、耳の下のあたり

にさえ、衰えをも見せていない」

と言った。また、やはり昔から、久しく知っている人が、

「先日向うから自動車が来たので、ふと見ると、美しい人が乗っている。大橋令嬢かしらと思つて近づくとお母さんだった。お嫁にゆくほどの年頃の娘さんと、ふと見違えたといつても、間ちがえるのが、決して無理ではない。」

といった。それはほんとに過褒かほうではない。令嬢たちはみんな美しくて上品だが、母君の持つ美しさには、ただ上品ばかりでない洗練されたものがある。

彼女の生立ちおいたは——それは、ほんのすこしばかりしか知らない。余計な穿鑿せんさくだては入らないことと、強しいて探出さがしたそうとはしなかつたが、慥たしかな説に拠ると、上州で、かなり資産家の一人息子に父親は生れたらしい。その時代の頽廢たいはい派でもあつたのか、生家ゆきぎとは行来もせず、東京へ出て愛する者と共に住み、須磨子さんを生ませたのだった。

——大正九年十一月——

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1920（大正9）年12月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大橋須磨子

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>